

6/10(金) 第102回 東京オペラシティ定期シリーズ

6
10

● オール・ドヴォルザーク・プログラム

ドヴォルザーク (1841-1904)

序曲『謝肉祭』 作品92(B.169)

『謝肉祭』作品92は、演奏会用三部作『自然、人生、愛』の第2曲である。第1曲が『自然のなかで』作品91、第3曲が『オテロ』作品93だが、圧倒的に『謝肉祭』が頻りに演奏される。

ドヴォルザークは、『謝肉祭』をわずか1か月半(1891年7月28日から9月12日)で作曲した。その間に彼は50歳の誕生日を迎えている(9月4日)。すでに国際的な名声を得ていたドヴォルザークは、前年にはケンブリッジ大学と母国プラハ大学から名誉博士号を授与され、『謝肉祭』はプラハ大学への返礼として作曲された。

ところで、謝肉祭(カーニヴァル)は復活祭(イースター)と関係が深い。そもそもキリスト教では、十字架刑で亡くなったイエスの復活こそが、宗教上もっとも重要な意味をもつ。その復活祭(3月から4月にかけての移動祝日)を迎える前の40日間(四旬節)の断食(もともとは「肉断ち<Caro vale>」)の直前に、ごちそうをたらふく食べてどんちゃ

ん騒ぎするお祭り、それがカーニヴァル(Carnival)なのである。

ドヴォルザークの『謝肉祭』も、このお祭り騒ぎをほうふつとさせる。冒頭からはじけるような活気あふれる主題がはじまり、お祭り気分を引き込まれる。トロンボーンやチューバだけでなく、タンブリンやトライアングルも大活躍する(この曲はよく、打楽器奏者のオーケストラ入団試験の課題曲になる)。

喧騒が一段落すると、フルートやオーボエによる別世界(中間部)が訪れる。このメロディは、第1曲『自然のなかで』の「自然をあらわす主題」である。短いヴァイオリン独奏のあと、お祭りの喧嘩がまた戻ってくると、盛り上がりは最高潮に達し、トゥッティ(オーケストラ全員による強奏)の熱狂のうちに曲は閉じられる。

[楽器編成] フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、シンバル、タンブリン)、ハープ、弦楽5部

ドヴォルザーク (1841-1904)

チェロ協奏曲 口短調 作品104 (B.191)

- I. アレグロ (約16分)
- II. アダージョ, マ・ノン・トロツポ (約11分)
- III. フィナーレ: アレグロ・モデラート (約13分)

ドヴォルザークのアメリカ時代(1892-1895)の最後にかかれた、名作中の名作(第1稿1894年11月8日~1895年2月9日)。交響曲第9番『新世界より』や、弦楽四重奏曲第12番『アメリカ』からほぼ1年半を経て作曲された。とはいえ、その間ドヴォルザークは望郷の念にかられて、ほとんど作曲が手に付かず、2年余りの「アメリカ時代」と呼ばれている割に、実際には夏をはさんで半年もチェコに帰っていたのだ。だからチェロ協奏曲も、アメリカ音楽の直接的な影響よりも、故郷ボヘミアの色のほうが濃厚に表れている。

この曲はさらに、24歳のときの初恋の人、ヨゼフィーナ・チェルマーコーヴァへの思いも込められている。ちなみに、その妹がドヴォルザークの妻となる。

第2楽章のチェロ独奏パートのメロディは、ドヴォルザークの歌曲のなかでもヨゼフィーナがとりわけ好きだった「私にかまわないで」(1887年作)なのである。そのヨゼフィーナだが、ドヴォルザークがプラハに帰国した直後の1895年5月27日に亡くなってしまふ。彼は、同年2月9日にいったん完成していた第3楽章の終結部を作り替えることにした。

第2稿は同年6月11日に完成したが、最後の最後に出てくる、コンサートマスターの独奏するメロディは、まさに歌曲「私にかまわないで」なのである。ドヴォルザークはこれにより、ヨゼフィーナに対する追悼の念をこの協奏曲に刻み込んだのであった。

第1楽章 アレグロのソナタ形式の楽章。ブラームスも絶賛した、旋律的な魅力にあふれる楽章である。チェロの美しい音色と、非常に難しい技巧的な側面が、交響的なドラマのなかでみごとに融合している。

第2楽章 アダージョによる抒情的な緩徐楽章。大きくA-B-A'の3部形式で、中間のB部分が、歌曲「私にかまわないで」のメロディである。原曲の歌詞の大意は「あの人は私を愛している！孤独な私の魂に、夢見が許されますように」というもの。なかなか意味深長である。

第3楽章 アレグロによる自由なロンド形式の楽章。民族色が豊かである。先述のとおり、終結部のコンサートマスターのヴァイオリン独奏が「私にかまわないで」のメロディ。その歌詞の後半は、「あなたの心を、すべてが死の苦しみへと駆り立てるとき、あなたは幸せをもたらしものが何であるかをわかるでしょう」となっている。この歌詞の内容を考えると、ヨゼフィーナの死がドヴォル

ザークに与えたショック、彼に残したものの大きさが窺い知れよう。

[楽器編成] フルート2(2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル)、弦楽5部、独奏チェロ

ドヴォルザーク (1841-1904)

交響曲第8番 ト長調 作品88 (B.163)

- I. アレグロ・コン・ブリオ (約9分)
- II. アダージョ (約11分)
- III. アレグレット・グラツィオーソ (約6分)
- IV. アレグロ・マ・ノン・トロツポ (約10分)

ドヴォルザークの交響曲第8番(1889年作)は、もっとも「スラヴ色」の濃い交響曲だといわれる。

おそらく、彼を取り巻く環境の変化も、創作に大きな影響を与えたのだろう。はじめてイギリスに招聘された1884年、その報酬などもあって、ドヴォルザークはプラハの南方にあるヴィソカーに別荘を建てた。彼は翌年から、公務がシーズンオフになる長い夏休みに、この豊かな自然にあふれる地で作曲できるようになり、創作力が爆発したのである。

交響曲第8番の作曲は、「ピアノ四重奏曲第2番」の完成からほとんど日をおかない1889年8月26日からはじめられ、9月13日には第1楽章のスケッチが完了。その3日後には第2楽章を、そのまた1日後には第3楽章を書き上げ、9月23日には最終楽章のスケッチも終わっている。まさに「筆が追いつかない」ほどの勢いで作曲されたわけだ。オーケストレーションをほどこして、最終的に11月8日にこの交響曲は完成した。

ドヴォルザーク自身、この交響曲は「新しい手法」で作曲したと自認していた(ドヴォルザーク研究の第一人者オタカル・ショウレクによる)。そのひとつは、彼がフランツ・リスト(1811-1886)の「交響詩」から受け継いだ、自由なソナタ形式の構成法である。もうひとつは、ボヘミアの田園風景を思い起こさせる音楽語法。そして彼自身の旧作からの引用の多さである。それぞれについては、楽章解説のなかで述べよう。

第1楽章 型にはまらない自由なソナタ形式の楽章。ト長調の交響曲なのに、冒頭部(第1主要主題)はいきなり「ト短調」ではじまる。ひきつづきフルートでのびやかにト長調の第2主要主題が歌われると、音楽は躍動的になっていく。

副主題部は、弦楽器が3連符のあわただしい伴奏をしているなか、木管楽器が(ファ#ツファ# | ファ#ー)と演奏する箇所である。普通のソナタ形式ならニ長調になるところ、この楽章ではなんと口短調になっている。

再び冒頭のト短調の音楽が回帰したところが、意表をついて「展開部」のはじまりだ。以下、これまでの音楽的断片が散りばめられたあと、トランペットで

高らかに第1主要主題が歌い上げられて「再現部」となる。最後は、たたみ掛けるようにして終わる。

第2楽章 アダージョの緩徐楽章。大きくは「A-B-A-展開部-B-A(終結部)」の構造になっている。冒頭部Aはハ短調で、弦楽器を歌わせたら天下一品のドヴォルザークらしい旋律の後、カッコウを思いおこさせるフルートの音型が登場する。このAは、同じ1889年の夏に作曲されたピアノ曲集『詩的な音画』作品85の第3曲「古い城で」とよく似ている。

つづくBの部分は、明るいハ長調となる上に、ヴァイオリン群が伴奏として下行音階をひたすら弾きつづけるので、聴いていてすぐにわかるだろう。やがて**ヴァイオリン独奏**があつて、トゥッティ(オーケストラ全員の演奏)となる。それが静まると、ふたたびカッコウも登場するAにもどる。

急に不穏な空気となり、展開部は切迫したような音楽となる。その後のBは、今度は木管楽器が伴奏にまわって下行音階を吹く。濃厚なAとなって終結部を迎え、ここではカッコウはトランペットが奏する。最後は静かに終わっていく。

第3楽章 3拍子の舞曲の楽章。ヴァイオリンのメロディは、哀愁を帯びたスラヴ舞曲を思わせる。長調に変わった中間部は、楽譜に指示はないが、ややテ

ンポを落として演奏することが多い。フルートとクラリネットがのびやかに演奏するこの主題は、自作のオペラ『がんこ者たち』(1874年作)の主人公トニク(テノール)の**アリア「若い娘と老人」**を引用したもの。ふたたび冒頭の短調の部分にもどり、最後は急速なテンポとなって終わる。

第4楽章 変奏曲風の自由な Rond 形式による楽章。トランペットのファンファーレで開幕する。ドヴォルザークはつくづくチェロが大好きで、この楽章も**変奏主題**はチェロで呈示される。すぐにヴァイオリン群を従えた**第1変奏**となり、トゥッティによる勇ましい**第2変奏**がつづく。そのあとフルートの長いソロが聴かせどころ。

ふたたびトゥッティの**第3変奏**となったあと、ハ短調となって土俗的なリズムがヴィオラで刻まれる。音楽が切迫して盛り上がり**第4変奏**となり、その到達先がトランペットとホルンによるファンファーレの再現である。ふたたび冒頭と同様のチェロによる主題が回帰したあと、トゥッティの**第5変奏**は勢いを増し、スラヴ舞曲のように熱狂的に終わりを迎える。

[楽器編成] フルード2(2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2(2番はイングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部

のもと・ゆきお(音楽学・指揮)／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部芸術教育学科教授、オーケストラ指揮者。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」の元監修・解説者、同「ららら♪クラシック」のららら委員長、同Eテレ学校番組「おんがくプラボー」番組委員。「題名のない音楽会」ほかに出演。最新刊に『クラシック名曲のワケ』(音楽之友社)。